

ローマの平和、イエスの平和

(イザヤ一・一〜一〇他)

外務省のホームページを見、思わず唖ってしまった。安全でない、いや非常に危険な国が実に多いのだ。アフガニスタン、イラク、南スーダン、そしてシリア。これらの国には退避勧告が出ている。要はそこに行くことも、留まることも勧められないということだ。戦後七〇年に渡って平和を享受してきた国に住んでいると平和は何か空気のようなものに思えてしまうが、外国の現況を見るとその認識は正しくないことがよくわかる。そんな退避勧告の出ている南スーダンへ自衛隊を派遣し、あまつさえ「駆け付け警護」までさせようとしている日本の為政者たちを見ると、今こそ平和について真剣に考えねばならないと思うのは私だけではないだろう。

閑話休題。クリスマスはイエスの誕生をお祝いする日であるが、聖書にはイエスのことを「平和の君」と呼んでいる箇所がある。今晚はこのイエスのもたらす平和と世間一般に言われている平和を比較しながら、イエスがこの世にきた意義を考えたい。

一、ローマの平和(人間の平和)

もしイエスが「平和の君」と呼ばれるお方であるなら、彼が来たのは戦争で人心が荒廃しきつているような時であろうと推測する向きもあるかもしれないが、歴史家の見立ては異なっている。イエスがこの世に生を受けたのはローマの初代皇帝アウグストゥス(オクタヴィアヌス)在位の時であり、パクス・ロマーナ(ローマの平和)が確立した時期であった。彼は四〇年に渡る治世において版図を拡大し、内政を充実させ、通貨を整備し、年金制度を整え、レンガの町と呼ばれていたローマを大理石の街に作り変えた。確かに彼は平和を作り出した。

しかし彼の作り出した平和は戦いに次ぐ戦いとめどなく続く流血の惨劇の末に作り上げた平和であった。要は超大国による覇権主義の結果である。この種の平和が常に武力と共にあることは歴史が証明している。「パクス・ロマーナ」になぞらえられた「パクス・ブリタニカ(イギリスの平和)」や「パクス・アメリカーナ(アメリカの平和)」さらには冷戦期の状況を見てもそれは明らかである。そうした状況下では皮肉にも銃や爆撃機に「ピースメーカー(平和を作り出すもの)」という名が冠せられる。これが人間の作る「平和」なのだ。

二、イエスの平和

では平和の君、イエスの平和とはどのようなものだろうか。イザヤ書一章によればそれはメシアの上に留まる主の霊によるものであることが解る。更に主を畏れ敬う彼の支配は弱い者や貧しい者を弁護するものであり、神の正義と真実に根差すものであることが示されている。つまり世界が待ち望む平和の君、イエス・キリストのもたらす平和は人間的な手段、即ち武力によって平和を作り出すものではないのである。

実際イエスの生涯を見れば彼がそうした地上の権威・権力に訴えて平和を造ろうとはしなかったことは明白である。イエスに希望を見出し熱狂した群衆はイエスを王にしようとしたが、彼はそこから去り、最終的にはそうした手段に一切訴えることをせず、ユダヤ人の王と言う罪状をつけられ殺された。表面的に見れば全くの犬死だ。だが実にこの事実こそが真の平和への道だったのである。なぜならイエスは自らに神に罰せられることにより、神と人との間にあつた敵意を廃棄し、同時に人々との間に置かれた隔ての壁を打ち壊したからである。こんなことを聞くと荒唐無稽だと思ふ方も多いただろう。しかしイエス信じる者はこの十字架のゆえに神との間に、また人との間にキリストにある平和を

育てることができる。イエスの平和は神の全人類に対する愛とその表れであるイエスの十字架によって打ち立てられた霊的な支配なのだ。

* * *

「キング・オブ・ポップ」はかのマイケル・ジャクソンのニックネームにしてベストアルバムだが、私のお気に入りには「マン・イン・ザ・ミラー」で決まり。歌もいいが歌詞もいい。骨太なメッセージソングだ。世の中を良くし、真に心満たされる人生を生きるためには、自己中心的な愛を追い求めることをやめ、目の前にある貧困やそれに伴う悲しみに真摯に向き合い、まじ鏡の中にいる人間、即ち自分自身から変わっていくこと。この単純明快なメッセージに生きることだと彼は歌い上げる。その通りだ。まったく素晴らしい。その意気や佳しだ。しかしどんなに鏡の前の自分に向き合っても、変革を叫んでも、すべての人間が自らを律し、平和を作り出すことは出来ない。人間の罪業、真実なものとの断絶はそれほどまでに根深い。イエスはその罪業と断絶から人を救い、神との平和、人との平和を私たちに与えるために来られたお方だ。このお方を今日心に迎え入れよう。平和はそこから始まる。

メリー・クリスマス。